



暁 鶏館 文学 作品 紹介



暁鶏館に訪れた人々の日記や文学作品を紹介します。すべてを掲載することは難しいため、一部のみ抜粋して紹介します。

紹介する作品は、国会図書館デジタルアーカイブやお近くの図書館でも読むことができます。

なお、一部読みやすいように表記を変更しています。

掲載作品一覧

○島崎藤村

「利根川だより」(明治三十一年)

○国木田独歩

国木田独歩書簡(明治三十三年、明治三十八年)

○尾崎紅葉

「銚子紀行」(明治四十一年、「十千万堂日録」付録)

○泉鏡花

「鷺の灯」(明治三十六年)

○田山花袋

「銚子」(大正六年)

「銚子の海水浴」(大正七年)

○吉田絃二郎

「犬吠岬紀行」(昭和二十二年)

・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
24	18	15	13	8	5

○高村光太郎

「犬吠の太郎」(大正元年)

「人に」(昭和十六年『智恵子抄』より)

○大和田健樹

「三社めぐり」(明治三十二年)

「波枕」(明治四十一年)

○内田百閒

「房総鼻眼鏡」(昭和二十九年)

○渋沢栄一

「日記」(慶応四〜大正三年)

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
28

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
37

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
41

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
49

○島崎藤村 (1872-1943)

岐阜県馬籠村出身。北村透谷らと『文学界』を創刊。詩人として活躍し、三十四歳で出版した『破戒』を皮切りに小説家としての地位を確立しました。

「利根川だより」(明治三十一年)

〔藤村全集第一巻 詩と散文〕大正十一、藤村全集刊行会発行)

四月二日

日暮れに銚子に着き、大新に泊まる。(要約)

四月三日

大新を出て、犬吠埼に向かう道中で雨が降り出す。(要約)

犬吠岬には暁雞館といへる海水浴あり。海に向ひ岩に添ひたれば雨風烈しく吹きつけて、海づきの戸は皆な閉しぬ。人々のうきことに思ひて、茶に親しむあり、碁を友とするあり。波の音もかく荒れまさりては耳につきてうるさし。湯に入りて心地すがすがしくなりぬ。猶、雨中の族に身の勞れたれば、枕を乞ひて横になり、足なげ出して小冊子

などくりひろげたれど、このつれづれなぐさむによしなし。

四月四日

けさ晴れたれば海のほとりに出でて遊ぶ。玉のごとく清き小砂利を歩みて突き出でたる巖石の間をつたひ、高く危き岩の上へのぼりて挑むるに、白波の砕けて飛び散るさま、海潮の磯に流るゝさま、その奇譬（たと）へんに物なし。われ磯辺に遊ぶことを好みてさまざまの海を見たり。高知にて見しは彩色画の麗しきにも似、須磨にて見しは墨絵の淡きにも似たり。鎌倉にて見しは静かに、国府津にて見しは壮なりき。小湊にて海を見しは日いと晴れたる初春にして、荒浜に海を見しは雲おもしろく空高き秋の半なりけり。それ海を窺ふは夢を見るがごとし。水底の石は敷ふるによしなく、いづこをはてといふよしもなく、いづこをかぎりといふよしもなし。湖の畔のさだかに、川の底の明かなるに比ぶれば、海は荒唐として窺ふによしなきなり。海を見てかへりて心かき乱さるゝといひし人もありとかや。されど朝暮の眺めをつくして磯辺に変化のさまざまをあらはし、動きてはいみじき旋律を起し、沈まりてはたへなる色彩を映じ、さては心のあるものをしてかの他界を窺ひ見るの思あらしむる海の姿のおもしろさ。こころせよ、表は潮行きかへりて大波の立ち騒ぐとも底安らかに静かなるわだつみのさまは、かの希臘（ギリシ

ヤ)の美術の姿なりといふぞかし。花さき乱るゝ岡辺のにほひをのみよしといはば、われ海の香をいはむ。日の光さしてらす野末の色をのみめづらいいはば、われ海の色をいはむ。

砂清ければ手拭にて足をはたき、満潮の時を宿の女に問ふに、午後二時頃なりといふ。さらばそのころここを出立して、海の潮をも見、磯づたひに銚子にかへらんものと語れば、せめては一週間ほども逗留せよなど世辞よく、磯づたひの道のさまなどわれに語りきかせぬ。晴の光障子にさして鳴く鳥の声ものどかに、客は出でて庭に遊び戯るるあり。この海水浴に来る男女を見るに、皆な遊びに余念なきこと小児の如し。われも八、九歳の小児のごとくになりて庭のブランコに乗り、勞れては浴場に行きて塩湯に入ること度々なりしかば、すこし上氣して頭痛み顔赤くなりぬ。かなたの部屋にて月琴の音聞こえたれど、調子いとおぼつかなし。昼過ぎて銚子のかたを目ざし出で立ちぬ。犬吠が岬の灯台は高く岬のはなに立てり。立ちちる白波も身にせまるがごとく覚えて、往来の人も絶えたれば、いとものさみし。いかに寂寞と憂愁とを友とする世捨人すらかかる磯辺にさすらひては人恋しく思ふらんなど、さみしさに耐えかねてはかかることも胸に浮べて、一歩一歩と砂地を行くに、うしろの景色も高き岩にかくれぬ。(後略)

○国木田独歩 (1871-1908)

国木田は銚子に生まれました。独歩は故郷銚子を何度か訪れていますが、暁雞館に宿泊したのは明治三十三年、明治三十八年のことです。

独歩は三十八歳の若さで亡くなりますが、病床で記した『病床録』に犬吠埼で見た景色を忘れることはできないと書かれています。

夏の波は高く、冬の波は低し。

土用七月の波、これを犬吠岬に見る。その壯觀未だ忘るゝ能はず。

〔『病床録』明治四十一〕

海鹿島にある詩碑「山林に自由存す」は詩人・日夏耿之介の揮毫によるものです。

独歩書簡

〔『国木田独歩全集六』昭和十三、新潮文庫〕

明治三十三年三月四日 銚子暁雞館

岡落葉氏宛

拝啓

暁雞館に着くや直ちに入浴、其の快は言はずもがな、但しあかの出たのには我れ乍ら驚き候。其れも其筈入湯せざること、此処に三週間、トテモ他人の傍でもこすれない程のあかと申すよりも寧ろ鼠のくそ、ぞろぞろとこぼれ候。幸ひ小生一人ゆえゆるゆると大々清潔法を施し、一皮むいたる心地致し悠然として乃公の部屋に帰れば卓上君よりの端書あり何とも言へず嬉しく存候。

二日東京を發し（中略）漸く本日午後暁雞館へ入ることを得候。先づ四五日は滞在し十分海氣を呼吸致す存念に御座候。

不幸にして天氣模様悪しく凍雲垂れて水平線を押し怒濤の岩打つ音ものすごく慘憺たる光景に御座候。流石に室内は暖かくシャツ無しで堪えられ候。但し天氣が悪くては散歩も出来ず余りうれしく御座なく候。唯何となく人寰（じんかん）を脱出致せし思これあり悠々たる哀思の禁ずべからざる処、即ち我出遊の賜なるべきか、実は兄と同道ならば其快は百倍ならんと存候ものを、これのみ残念に御座候。

明治三十八年四月二十四日 夜

治子夫人宛

(前略)

銚子の停車場から今度は車二台、代価一台三十銭、暁雞館に着くと一群の女隊が今しも帰る処、後で宿帳を見ると日本橋大伝馬町の商人で女が十二三歳から二十四五まで五人、男が三人、最初暁雞館の裏門で遭った時は何処のお嬢様かと思った。いづれも当世のハイカラ風俗、チエー一足遅かつたかとも何とも思ひはしないが、但し少しは惜しいやうな気がした。

暁雞館のおかみは自分を記憶して居た。年増（実は四十四五のバアさん）のおしやべりが自分専任の女中ときまつた。

板を見ると食ふものがなささうだ。但し自分は食ひ度も飲み度もない、少しも早く此病気を快復したい、今日も汽車の中でツクツクと思つた、健康は第一の要素だと。

近隣の室で二絃琴の調子しらべの音が今する。外は波の音が高い、何だか悲しいやうな気がして来た、ままになるならお春もお君さんもおばアさんも子供も皆で此家に二晩ほどとどまつて見たい。（後略）

四月二十五日 夜

治子夫人宛

(前略) 昨夜は快よく寝た。雨が戸にあたる音と浪が磯にくだける音と相和して何とも言へぬ哀れを感じた。今朝は少し頭が痛いやうであつたが次第によくなり、午後は雨も降らず風も静まりたれば写真器を持つて磯に出て思ふさま波の様を写した。

(中略)

かこのぼんは暁雞館の犬の御馳走になてしまった。それで犬がやたらに拙者になつて、今日も岩の上で頻りと写真を採つて居ると、後から自分の背に手をのせるやつがある。びっくりして見ると犬が御機嫌うかがひに来たのであつた。今では自分の友だちは此犬ばかりだから尚ほ此犬が可愛いので、写真から帰つてとーまんぢゅうをくれてやつた。自分は明日も此犬と遊ぼうと思ふ。(後略)

四月二十六日 夜

治子夫人宛

(前略)

今日も銚子の海は曇りて今にも雨降り出んとし、心もとなく暮しつ、さりながら拙者は思ひきはめて午後散歩に出候、北風の寒く磯うつ波の荒きをもいとはず心地よく浜に出でて南のみさきの方をさし歩み候、浜には人の影も候はず、波は荒れ風は寒く誰のもはずきが、かかる日に散歩せんとする、ただ我ひとり也。最早や寒合せざる也。寒風に吹かれて何事もなき也。ただ頭丈は朝の起きたてに痛み候也。(後略)

○尾崎紅葉 (1868-1903)

東京出身。明治時代の文壇における大家。泉鏡花など多くの門弟を輩出しました。

明治三十六年、三十七歳で逝去する六か月前に家族同伴で銚子を訪れています。

「銚子紀行」

『十千万堂日録』明治四十一、左久良書房

明治三十六年四月二十三日

(前略)

灯台の尖頭漸く林越しに没して、潮声の鞞鞞(とうとう)既に耳を驚かす。一路茂松の間を穿ちて曲折し、紆回し、竟に暁雞館の後に出づ。館は茂松の岡を負ひて海に臨む。

一岡の松皆瘦勁にして、老氣有り。

(中略)

室は海の森々(びようびよう)たるに面し、南に犬吠の燈台を望み、北に斗出の岬を控え、断磯乱巖前を擁し、怒濤萬丈の素鍊を翻し、飛沫急雷を□□□□。□□□□を砕き□烟を噴く処、最も看瀾の興を縦にすべし。

此日風力凜惡、洶湧声を作して、竟に其煩に堪へず、病思頗る惱めり。

夕に近く風稍緩く、落日波を照して、水光座に入り、衣袂顔色皆明也。

浴前体量を測るに、十一貫八百九十目。

晚餐の後、胃鉋痛を發すること常に癒えたり。鎮痛剤頓服。衾を擁すれど寒冷不堪。懷炉を抱きて眠る。

夜涛撼屋

※□は参考にした資料のまま。

○泉鏡花（1873-1939）

石川県金沢出身。尾崎紅葉の門下。神秘的なロマン主義的作風の作品を多く残しています。

「鷺の灯」（明治三十六年）

『鏡花叢書』名家小説文庫…第十編 明治四十四、博文館）

あらすじ

私は福井のとある旅館で榊原が体験したという怪談話に耳を傾けていた。温泉宿の夜巡をしていた甚吾爺という男から聞いた、庄屋の森にある池に浮かぶ鷺の灯の怪である。

甚吾が夜見回りに行くと、池に青鷺がいて、何度も驚かされたため、ひとつ懲らしめてやろうと躍起になった。鷺の脚を狙ったつもりが、どういわけか女の着物の裾を払っていた。不思議に思っていると、どこからか別の声が聞こえて逃げ帰って来たのだと。青鷺に化かされたのではないかと考えた甚吾は、退屈しのぎにどうかつきあってはくれないかと、榊原を誘う。

甚吾爺に付き合っって鷺退治に出かけた榊原は、威勢のいい甚吾の声を聞きながら、気

が付いた時には大池のほとりにいた。

夜目が慣れてきたので、棒を頼りに池のそばに近づくと、向こう岸のほうで水面の上に炎が燃えたのが見えた。次々と灯が浮かび、そうして目も眉もない女の姿が映る。女はもう一人いて、小柄な方の女と目が合ったかと思うと、榊原の名を呼んだ。榊原が驚いて倒れると、その腕を助け起こす者があって、さては爺だなど思ったが、どうも違うようで恐ろしくなってしまった。

その者に引きずられていった先はとある屋敷で、そこに女が一人立っている。地の底にでも連れてこられたかと思つて観念していたが、隣の部屋の襖が開くと、そこには彼の許嫁がいた。

彼女は盲目になつてからは表に出ることもなく、齋念寺の森の庄屋の屋敷跡に乳母と二人で暮らしていたという。彼女も甚吾爺から同じように鷲の灯の話を聞いて、一目見てみようと乳母と連れ立って同じ晩に池のほとりにいたところ、榊原の姿を認めた。彼女に縋られ、乳母からも頼まれて、ついに榊原は彼女を妻に迎えたのだという。

七年を過ぎたといふ、此の物語を私は銚子の曉雞館で雨の夜に聞いた、齋念の鉾泉の家の建方が、能く彼処に似て、然も小松原の彼方の新池といふさへ、花菖蒲其の趣に異ならずとかや。

浪の音、松の風、雨の小留に灯暗く、夜はハヤ一時に近い。

「酒が冷たうなりましたが、お話の梭の音も聞こえませんが、女中どもは皆寝たでせう」
「丁ど恁ういう晩でした」

榊原は其時分はなかつたといふ、髯を撫でて莞爾として、
「忘れしました、甚吾爺は、池から這い上がって逃げたといふです」

○田山花袋 (1872-1930)

群馬県館林出身。尾崎紅葉の門下江見水蔭に学びました。島崎や国木田らと交流を持ち、自然主義文学の代表的作家となりました。

明治四十二年『インキ壺』『梅雨(六月)日記』には、独歩とともに銚子を訪れたことや、銚子が好きだということが記されています。

六月二十五日

午後五時、蒲浦有朋氏来訪、久し振りにていろいろなる物語に耽る。近き頃銚子に遊びたりとて其感を語らる。予も銚子は好きなり。銚子は東海岸にては第一なるべし。予は三十八年四月に故独歩と共に遊びたることを語りぬ。(後略)

「銚子」

『山へ海へ』大正六、春陽堂

銚子の犬吠埼の下にある暁雞館、その中央を貫いた長い廊下、その両側に室がある。左は海に面してゐる。右の室は裏の松原に面してゐる。

松原の方に面した室を私は好きだった。私は其処でよくハイネの詩を吟じた。又詩を

つくつた。後にはそこで短編を書いたことなどもあった。

考へると種々な記憶が浮び出して来た。最初はY君がゐる処に訪れて行って、其処に十日ほどゐた。Y君は海に面した一間を借りてゐた。床に生けた花瓶の花、それも美しかったが、それよりもいっそう若い私達の心を惹いたのは、頬の豊かな目の涼しい綺麗な女中であつた。私達はまだその時分は恋にのみ生きているやうな青年であつた。

私達は長崎の鼻まで小豆に似た小さな貝をよく拾ひに行つた。

あまたある貝のその中に

交じりはせやわすれ貝

Y君のうたつた詩の中に、さういふ句があつた。Y君の抒情詩、其時分の詩壇を動かしたY君の抒情詩は、大抵その海岸で出来たのが多かつた。Y君と私はいつとも伴れ立つて浜を歩いた。

磯に湧き出している清水、松原の中の夕日影、唯それだけにすら、私達の若い心は躍つた。私達はいつも裏の松原を越して出かけた。灯台へ行く道から別れて君ヶ浜の方へ下りて行くところは、草が繁つて朝露が深かつた。Y君は其処で悲しい別れをした話などを私にした。

波の音、湧くやうな波の音、それが毎夜私達に夢にかよつた。ことに、夕暮の、日を後にした海の色は、わびしい悲しい私達の思を動かさずに置かなかつた。ハイネの“Nordsee”の詩がいつもY君の口に上つた。私は其処から帰つて、『かた帆』といふ小説を書いた。

その次に行つたときには、K君が其処に行つてゐるのを訪ねた。Y君と行つた時から比べると、私達は既に深く世間の波に浸つてゐて、その感じも心も何も彼も全く違つてゐた。ことに、K君は忙しい煩累の中から僅かに一週日の閑暇を得てそしてやつて来たのであつた。私達は多くは酒を飲んで暮した。丁度その時分は、日露戦争当時で、隣室に夫の戦役に行つてゐる留守をかうしたところでのんきに暮てゐる海軍の士官の細君などがゐた。蓄音機などをよく鳴した。

K君は言つた。「何うだ、君、僕位人づきあいのわるい奴はないね。此処に来て、もう三日になる。それでゐて、懇意になつたのは、犬ばかりだからね。一番先に犬と懇意になるなどは面白いじゃないか」その犬は客がよく物を呉れるので、いつもその前の広場で寝たり起きたりしてゐた。何でも其後聞くと、其処にゐる犬は今でもゐるが、二代も三代も變つたといふことである。

(中略)

それから十年近くも歳月が経過した。そして又私は出かけて行つた。K君を訪ねて来た時から比べると、もつと深く私は世間に入つて行つてゐた。『かた帆』なぞといふ小説を書いた時分の私は、丸で私ではないかと思はれるほど、心も気分も変わつてゐた。私は四十五六の女と二十六七の女と三人して来た。私は暁雞館に一夜泊まつた。

(中略)

私には矢張、海に面した方の室よりも、松原に面した方の室の方がなつかしかった。私は昔と同じその静かな松の音を聞き、同じやうにさし込んで来る夕日の影を見た。Y君とよく出かけて行つた磯清水は昔と違つて立派な井戸になつて、赤い襷をかけた旅舎の女中が水を汲んでゐた。

其時分には、此処に来るには、銚子から二里ほどの高原の路を歩いて来て、松原の上に見える白い灯台をなつかしんだものだが、今は軌道が出来て、暁雞館の裏の松林をぬけると、そこにその終端駅の小さな停車場が見えてゐた。

帰りには、私達は、軌道の汽車の中から、林のところどころに赤く咲いてゐる山躑躅や海鹿島の向うに展けた海や、穂ののびた麦畠などをなつかしみながら、本銚子の停留

場で下車した。飯沼の観音堂に詣づるために。

Y君：柳田国男

K君：国木田独歩（前掲の手紙に犬の話題が出てくる）

「銚子の海水浴」

〔一日の行楽〕大正七、博文館

私は銚子が好きだ。東京近くの海水浴では、何うしても銚子が一番好きと思う。相模の海岸には、私は余り思ひを残さない。房州などは殊にイヤだ。上総の太平洋海岸は割合に好いが、しかし設備がまだ幼稚すぎる。田舎すぎる。『海岸は何処が好いでせう？』かう聞かれると、私は躊躇するところなく、銚子と答へる。

（中略）

汽車は同じやうな高原の中を通って行く。やがて犬吠の白色の灯台が松の林の上に見える。え出して来る。好い心持ちだ。やがて終点に着く。

ここから、酉明の海水浴場までは、二三町しかない。砂の多い畠の中を通つて、松原にかかる。波の音が地を撼かすやうに聞こえて来る。何とも言はれない。

暁雞館といふ旅館も私は好きだ。私は其処には何遍も行つた。その旅館の出来た翌年か、友達の行つてゐるを訪ねて、十日ほど其処にゐた。朝の海、夜の海、殊に夕の海が好かつた。入日を後ろにした海の暗碧な色は、此処でなくてはちよつと見られない。私は長崎の鼻まで行つて、そこで小豆貝といふ貝を拾つて来た。

暁雞館の室々は、中央に長い廊下があつて、右は海に臨んだ室、左は裏山の松原に面した室、かう二通りにわかれてゐるが、私は何方かと言えば、明るい海に面した室よりも暗い静かな松原に面した方が好きで、よく其方の室に入れて貰つた。波の音の間に聞こえる静かな松風の音、それが胸に染み入るやうな心持がした。

暁雞館から灯台に行く道は、朝が好い。草履をはいて、朝露にぬれた草を踏みわけて行くと、例の深く広い石切場の光景がその前に展開されて来る。よくもかう深く刻んだものだと思はれる。それを見てから、茶店の前を取つて灯台に行く。左に、君ヶ浜の長い湾曲した汀線が見えて、それに波が白く打ち寄せて碎けてゐる。

(後略)

○吉田絃二郎 (1886 | 1956)

佐賀生まれ。教職のかたわら詩や小説を執筆し、1934年に早大を退職し作家活動に専念します。小説、随筆、評論、児童文学等幅広い分野で活躍しました。

「犬吠岬紀行」

〔旅より旅へ…紀行選集〕昭和二十二、齊藤書店

(前略)

わたくしは幾年振かで波の音を聴いた。

暁雞館の二階のガラス戸も、すっかり、潮を含んだ沖の風に濡れてゐた。

わたくしは、縁端の椅子に寄りかかって、暗い海をながめた。いつの間にか、雲がちぎれて星がまたたいてゐた。雪のやうに白い波頭が、暗の底に碎けては散った。

暗い夜の海ほどわびしいものはない。そこにはただ一つの光りもない。咽ぶごとき、歎歎(きよき)するがごとき怒濤の音のみが相迫り、相搏つては、旅人の心を誘ふ。悲しきにあらず。頼りなきにあらず。名づけがたき沈静である。もし名づくべくんば、悠久そのものの懐に還りゆく心であらう。

暗夜の怒濤に対すれば、何となく、青年時のごとくわたくしの胸はうづく。

遠い水平線上を走る汽船の灯が、やがてまたたきつつ、やがて暗の虚空に帰してしまふ。ふたたび、そこに、死のごとき暗がとりのこされる。

犬吠岬の灯台をめぐって淡い霧がかかって来た。時折、牛の吠えるやうな霧信器のサイレンが暗い海に響く。

「今朝この裏の松山で、五十幾歳の男と女が心中してみました。そんな年になりました。でも死なねばなりませんかなあ。」寢床をのべに来た若い女中は、硝子越しに暗のなかの裏山を眺めてゐた。

恋でもない、情でもない、恐らく、人生に対するさびしさから死を選んだものであらう。若い男女の心中にはなお美しい夢がある。世の中を静かにさとり果て、あきらめ果てて、つめたい死の姿を見つめつつ死の途を選ばねばならなかった老夫婦の心中ぐらゐ気の毒なものはないであらう。夢に死ぬる人々の死には慰めもある。さめて死ぬる人々の死には何の慰めがあらう。

わたくしは枕もとに懐中時計を置いた。ちやうど十二時過ぎであつた。わたくしは、太平洋の水平線上にあらはるる暎(あさひ)を見たいと思つたので幾度か眼をさました。

午前二時に一度起きて波の音を聴いたり、窓を明けて暗い海を眺めたりした。遠い月があるかと思つて空をながめたが、月もなかった。

午前四時にふたたび起きて窓を明けて縁側に出た。空はやや明るく、海は白く漂うてゐた。風は冬のごとくつめたかつた。四時二十分であつた。灯台のやや右手の波の上に、たいまつをともしたやうな真つ赤な、一つ燭が浮き上がつて来た。点は直ちに線となり、弧となり、図々として黎明の水平線上に燃えはじめた。海は開かれ、空は明け、静かなる風は砂丘の上に朝の露を訪れはじめた。

「けさのやうに、水平線から直ぐ太陽が昇るのを見るといふことは滅多にないことです。たいていは、水平線の上に霧がかかつてゐることが多いのですよ。」というやうな浜の人の話を聴いた時、わたくしは仕合せであつたと思つた。

わたくしは浴衣の上にとてらを引っかけて、なほ海をながめてゐた。灯台の燭が消え、沖を走る汽船の黒い煙が朝風ぎの砂丘の上までも漂うてゐた。

朝の露を踏んで浜を歩いてゐる男もあつた。

すぐ庭先の、潮に濡れた黒い岩の上に、浜千鳥の群れが集まつて来ては啼いた。波が岩を打つたんびに千鳥は啼きながら岩の上を飛んだ。

わたくしは、二階から下りて浜を歩いて行つた。夜明けたばかりの浜の砂の上には、はつきりと、可憐な、千鳥の足跡が刻みつけられていた。わたくしは千鳥の足跡を拾ひながら、さらに松山の方へ歩いて行つた。暴風と月見草の花が、砂丘を埋むるばかりに咲いてゐた。わたくしはそこにあつた石の上にしやがんで沖をながめた。千鳥は絶えず啼いた。

わたくしはふたたび立ち上がつては砂丘を歩いた。疲れては石の上にしやがみ、立ち上がつては浜を歩いた。波に打ち上げられた海藻を拾ふ女たちが霧のなかを近づいて来た。

朝の食事のあと、わたくしは灯台の方へ歩いて行つた。この前、灯台を訪ねたころは、銚子から海岸の砂丘をずっと歩いて来たものであつたが、このごろは、銚子から電車が出来たために、松山のなかには、文化式の別荘の赤い屋根が見えてゐたりした。石材を掘つた跡が、自然、かなり大きな池のやうな形になつて、美しい雨水をたたへてゐたりした。

(後略)

○高村光太郎 (1883-1956)

東京府東京市下谷区に高村光雲の長男として生まれます。彫刻、絵画などを手掛けたが、近現代を代表する詩人として評価されています。代表作は『道程』『智恵子抄』など。

「犬吠の太郎」(大正元年)

太郎、太郎

犬吠の太郎、馬鹿の太郎

けふも海が鳴ってゐる

娘曲馬のひらを擔(かつ)いで

ブリキの鐘(かん)を棒千切で

ステテレカンカンとお前がたたけば

様子のいいお前がたたけば

海の波がごとと鳴って齒をむき出すよ

(『道程』高村光太郎詩集』昭和二十二、青磁社)

ね

今日も鳴ってゐる、海が——

あの曲馬のお染さんは

あの海の波へ乗って

あの海のさきのさきの方へ

とつくの昔いつちまつた

「こんな苦鹽（にがしお）じみた銚子は大きらひ

太郎さんもおさらば」って

お前と海とはその時からの

あの暴風の晩、曲馬の夜逃げ出した、あの時からの仲たがひさね

ね、そら

けふも鳴ってゐる、齒をむき出して

お前をおどろかすつもりで

浅はかな海がね

太郎、太郎

犬吠の太郎、馬鹿の太郎

さうだ、さうだ

もつとたたけ、ブリキの鐘を

ステテレカンカンと

そして其のいい様子を

海の向こうのお染さんに見せてやれ

いくら鳴つても海は海

お前の足もとへも届くんぢやない

いくら大きくつても海は海

お前は何てつても口がきける

いくら青くつても、いくら強くつても

海はやっぱりうみだもの

お前の方が勝つだらうよ

勝つだらうよ

太郎、太郎

犬吠の太郎、馬鹿の太郎

海に負けずに、ブリキの鐘を

しっかりたたいた

ステテレカンカンと

それやれステテレカンカンと

「犬吠の太郎」のモデルとなった阿部清助は、光太郎が暁雞館に滞在した当時、大浴場に海水を汲む役をしていました。今でいう知的障がい者でありながら、その天衣無縫、野性味が光太郎の心をとらえました。

その後、太郎は電車に撥ねられたのが原因で死去しました。暁雞館で亡骸を引き取って弔い、長崎の三昧墓地に墓が建てられました。その位牌は暁雞館の女中部屋に安置されていったそうです。

「人に」

(詩集『智恵子抄』昭和十六年より)

いやなんです

あなたのいってしまふのが――

花よりさきに実のなるやうな

種子(たね)よりさきに芽の出るやうな

夏から春のすぐ来るやうな

そんな理窟に合はない不自然を

どうかしないでゐて下さい

型のやうな旦那さまと

まるい字をかくそのあなたと

かう考へてさへなぜか私は泣かれます

小鳥のやうに臆病で

大風のやうにわがままな

あなたがお嫁にゆくなんて

いやなんです

あなたのいってしまふのが――

なぜさうたやすく

さあ何といひませう――まあ言はば

その身を売る気になれるんでせう

あなたはその身を売るんです

一人の世界から

万人の世界へ

そして男に負けて

無意味に負けて

ああ何といふ醜悪事でせう

まるでさう

チシアンの画いた絵が

鶴巻町へ買物に出るのです

私は淋しい かなしい

何といふ気はないけれど

ちやうどあなたの下すった

あのグロキシニヤの

大きな花の腐ってゆくのを見る様な

私を棄てて腐ってゆくのを見る様な

空を旅してゆく鳥の

ゆくへをちつとみてゐる様な

浪の碎けるあの悲しい自棄のころ

はかない 淋しい 焼けつく様な

——それでも恋とはちがひます

サンタマリア

ちがひます ちがひます

何がどうとはもとより知らねど

いやなんです

あなたのいってしまふのが――

おまけにお嫁にゆくんなんて

よその男のこころのままになるなんて

詩集『智恵子抄』は光太郎が妻・智恵子と出会ってから彼女が亡くなった昭和十六年（1941）までの三十年間にわたる作品を集めた詩集です。智恵子への愛があふれた、純粋な愛の詩集として知られています。

「智恵子の半生」に光太郎と智恵子の出会いが記されています。

「智恵子の半生」（詩集『智恵子抄』 所収）

丁度明治大帝崩御の後、私は犬吠へ写生に出かけた。その時別の宿に彼女が妹さんと一人の親友と一緒に来てみて又会った。後に彼女は私の宿へ来て滞在し、一緒に散歩し

たり食事したり写生したりした。

様子が変に見えたものか、宿の女中が一人必ず私達二人の散歩を監視するためついて来た。心中しかねないと見たらしい。智恵子が後日語る所によると、その時若し私が何か無理な事でも言ひ出すやうな事があつたら、彼女は即座に入水して死ぬつもりだったといふ事であつた。私はそんな事は知らなかつたが、此の宿の滞在中に見た彼女の清純な態度と、無欲な素朴な気質と限りなきその自然への愛とに強く打たれた。君ヶ浜の浜防風を喜ぶ彼女はまったく子供であつた。しかし又私は入浴の時、隣の風呂場に居る彼女を偶然に目にして、何だか運命のつながりが二人の間にあるのではないかといふ予感をふと感じた。彼女は実によく均衡がとれてゐた。

やがて彼女から熱烈な手紙がくるやうになり、私も此の人の外に心託すべき女性は無
いと思ふやうになつた。(後略)

○大和田健樹 (1857-1910)

伊予国宇和島出身。国文学者。東京大学や私立大学などで講師を務め、和歌、謡曲、国文学に関する著作を発表するとともに、「鉄道唱歌」など唱歌の作詞にも多く携わりました。

「三社めぐり」(明治三十二年)

(『深山桜…散文韻文』明治三十二、博文館)

(前略)

灯台の丘に立てば、さしてゆく暁雞館は、ただ足元にながめおろされたり。あはれ居りながらにして太平洋と歌ふべく。寐てヴワンクーパーと語るべきは此家よ。暁雞の文字は如何にと問へば、此地トリアケの名あるを以てなりといへり。

着きたる頃より雨また来りて、波の上ただ薄墨と胡粉との外に色なきさびしさよ。されど家には湯あり酒あり友ありて、知らざりきいつのまに日の暮れたるをも。夜の更けたるをも。

折れかへる波の穂白くさよふけて　ともし火高し犬吠が崎

五日は海上の日の出を見んとて、とく起きたれど夜はまだ明けず。波の色のみ百足の如く寄せ来るに、明星よりも赤く輝きては、箒星に似たる尾を引くもの、雲透に高く仰がれたるこそ灯明台なれ。遠く波を射る光、その凄さ何ともいはれず。

やうやう明けゆけば、砂を踏みて散歩す。雨は落ちねど、朝日は遂にありかをだにも知らせずなりぬるこそ残念なれ。

白妙の衣かさねぬ岩もなし 波のふゞきやいかに寒けき

濁世の夢ものこらずなりにけり 岩噛む波のあかつきの声

湯に入りなどして、ゆるりと暁雞館を立ちたるは十時なりき。(後略)

「波枕」(明治四十一年)

〔野菊…散文韻文〕明治四十二、博文館)

明治四十一年二月

(前略)

暁雞館に至れば昼に近し。今しも丁度、湧きたりといふ汐風呂に入りて、さらに風光
壮大を極めたる。大海原に向ふ。岩づたひしつつ、鷗の遊ぶ長崎は、右にあり。中空高

く立ちて、夜は船路を照らすべき犬吠の灯台は、左にあり。泡と渦巻き素麺と流れて、波の寄せかへる磯を前にしつつ、歌おもふ心地、誰かは知らん。昨日は四畳半の紙の間に、置きかねたりし此身ならんとは。

女やがて一枚の板もて来り、お肴はと問ふ。刺身はメヂなりといへば、魴鱒（ホウボウ）ならぬこそ幸よとて、それに定め、君ずしとは何ぞと問へば、鮓飯にしたる肴に、玉子の衣かけたるやうの物なりといふ。それもよからんとて、誂えたるに、羹の蓋を開けば、猶こそ魴鱒は顛れたれ。

仁王のごと立つ岩雄々し獅々のごと荒るる波凄し寄せて碎けて物にしるして盃出だせば、女は早くも何くか行きぬ。

（中略）

晚酌の肴は、魴鱒の天プラに葱の鍋。陶然として、隣の部屋の鼻唄浄瑠璃聞き居る程に、日は暮れたり。

星一つ空には見えぬ春の夜の波の上淋しともし火の影

灯台の外には、漁火も見えず、汽船も通らず。鉄瓶に水さす女は言へり。明日は雨になりませうと。

波まくら夢見る程もゆるさぬは何に夜を守る犬吠が崎

夜も明けぬ。女は我を欺かざりき。

朝日見んと雨戸あくる手に散りかゝる霏つめたし沖暗くして

(中略)

汐湯に入りて、朝食の箸取る。魴鱈の味噌汁に、瓜の奈良漬、物こそ変らぬ、調理の
変りたるは、宿のあるじの心用ひを知るべし。波は一つの波なれども、雨に嵐に朝に夕
べに、尽きぬ眺めの、味はるるこそ楽しけれ。

○内田百閒（1889-1971）

岡山県生まれ。教師をやめたのち作家活動をはじめ、飄逸な「百鬼園隨筆」によって広く知られるようになります。鉄道好き。

「房総鼻眼鏡」（昭和二十九年）

『新ちくま文学の森一〇』平成七、筑摩書房

今度は向きを変えて、手近かの房総へ出掛けようと思う。

東京やその周辺に住んでいる人々に取って、房総半島はなじみの深い所だろう。鉄道の沿線なら、大体どこでも日帰りができるし、東京へ通勤している人もある。しかし、私は千葉へすら行った事がない。況やそこから先は、どこへ行くにしても初めてと云う点で、長崎や青森と変わりはない。あっちの方の線では、千葉の手前の市川、船橋までしか知らないのです、その先の旅程を考えるのは、大変新鮮な興奮を覚える。

（中略）

段々に銚子に近づき、少し風が出て、間もなく銚子駅の構内に這入った。終点の大き

な駅であるが、本屋全体の感じが倉庫か格納庫の様で、少し薄暗く、よその駅とは丸で工合が違う。駅長室に小憩して、呼んで貰った自動車で犬吠岬へ向かった。

(中略)

綺麗なお風呂があるらしいけれど、省略してすぐに始めた。今日の行程は疲れると云う程の事もなかったが、汽車があんまり走らなかつたり、利根川が大きな川だつたり、砂浜の色が暗かつたり、犬が追い掛けて来たり、いくらか気を遣わなかつたわけでもない。山系氏も、早く始める事に異議はなかつた。矢張り早いに越した事はない派であつて、だからすぐに始めたが、彼が利根川や黒犬で疲れているとは思えない。

「そうそう、貴君はお風気味だったが、どうです」と云つて私が差した。

「もういいです」

「俳句に菓喰いと云うのがあるね」

「はあ」

「稻荷鮎やキャラメルが利いたかな」

「そうです」

澄まして彼は私に酌をした。

御馳走だったが、しかし女中は時化で魚が不自由だと云った。海のそばだと却ってそう云う事になるかも知れない。まだ明るいうちに始めたのが、じきに暗くなって、左に見える灯台が廻転しながら、ぴかりぴかり光り出した。

夜に入ってから雨が降り出した。雨滴が海の風に乗って、ぱちぱちと硝子戸を敲く。

「そうれ御覧」

「何ですか」

「雨が降り出した」

「はあ」

「はあは無責任だね」

「降ってもいいです」

傍にいる女中が、何のお話だと聞く。

「この人は雨男なんだよ。この人が降らしているんだ」と云うと、怪訝な顔をして山系の額のあたりをしけしけと見た。

暗い海に向かった左手の出鼻で光る灯台の明かりを見ながら、外の所の景色を連想し

た。ここはこうして坐っている所から灯台までの間が余りに近いが、それでも夜の波を越えた左にあかりが見えると云うのが、何だか取りとめのない遠い昔の悲哀に通う様な気がする。東海道の由比、興津の夜は、線路につながった蒲原の辺りの灯火が、清見湯の波の向うにちらちらする。青森の手前の浅虫では陸奥湾の暗い海波の左手に、闇に沈んだ出鼻の岸を伝う夜汽車の灯火が隠見した。東須磨の夜は左に見える和田ノ岬の遠い灯が、明石海峡の向うに明滅して、中学五年生の私の旅愁をそそつた事を思い出す。

まだお膳が片づかない内に、と云うのはまだ杯をおかない内に、雨が歇んだ様である。そうして浪の音が荒くなつた。空が明るくなつたと思うと、切れ雲の間から、白いまん円い月が浪の上にからきら光り出した。今日は旧曆の十一月十五夜である。

*

枕許のねじれた障子の向うで、夜通し濤声を聞いた様に思う。しかしその為に眠れないと云う事はない。いつもの通り、いやいつもよりはもつと長く、十時間半寝続けて、枕にひびく浪の音の中で目をさました。よく寝られるのは有難いが、あんまり長く寝た後では、根が利口ではない、のではないかと自分で疑わしくなる。

起き出してベランダの椅子に腰を掛け、外を見ると、昨日よりはもつと背の高い大き

な浪が打っている。空は綺麗に晴れ渡って、暖かい微風が海の方から吹いて来る。師走の風とは思えない。

女中を呼んで、山系君にすでに起きている事を届け出てくれと頼んだ。知らない宿の朝、彼がどこにいるかと云う事は、私には見当がつかない。

間もなく雨が上がった朝の様な顔をして這入って来た。下の別の座敷で朝食を済まし、もう朝風呂にも這入ったそうである。湯殿の隣の砂浜の上に、硝子張りのサン・ルームがあつて、その腰掛けに腰を掛けていると、小さな犬が向うの腰掛けに腰を掛けて、こつちを見たとき変な事を云う。

「この下に見える、ほらあすこに犬がいるでしょう。あの犬です」

「犬が腰が掛けられるかね」

「そうですね、しかし掛けました」

女中がお茶を持って来て、今日も沖は荒れていると云う。こんなにお天気がいいではないかと云うと、陸のお天気と海が荒れるのとは関係がないと云った。

丁度上げ潮で、宿のすぐ下まで大きな白波が打ち寄せる。灯台の出鼻の下に、突怒偃蹇（とつどえんけん）と云った恰好の怒った様な岩が連なり、こつちから見ると向うの

海を低く遮っている。その岩の向う側に敲きつけて砕けた大浪の繁吹きが、岩の蔭から宙に舞い上がり、爆弾の様だと先ず思ったが、日清戦争の石版刷りの地雷火が炸裂した所の様でもあり、又少し離れているし、硝子戸を閉めているので、浪の音は聞こえないのに、そう云う壮烈な景色が展開するのが、昔の活動写真の戦争の場面を見ている様な気もした。

どこの宿屋の女中でもそうだが、私が起きたきりで、なんにも食べないから、いろいろと気を揉んでくれる。いらなんだよと云っても、彼女の方はそれでは済まされられないらしい。然らば牛乳があるなら持つて来てくれと云うと、畏まって降りて行つた。

女中の持つて来た牛乳を飲んでいる傍で、山系君が僕も飲もうかなと云い出した。女中を呼んで、もう一本持つて来いと彼が命ずると、気の毒そうな顔で、もう御座いませんと云つた。

後で山系の偵察した所によると、「先生は、一本しかない女中の牛乳を飲んでしまったのですよ」と云うのであつた。

なんにもしないで、と云つても、もともと何もする事がない、だからなんにもしないでいる内に午（ひる）になつた。今日の汽車は二時五十一分の銚子発、三時に近い。ま

だゆつくりしていられるけれど、車中が二時間半余り、そうして夕方千葉に着き、宿に落ちついてお膳に坐る迄、さっきの牛乳一本きりで済ませるのは少しおなかの虫に気の毒である。面倒だったら我慢して出来ない事はないけれど、しかし相手の山系が、腹をへらして風を引いては困る。宿屋のお午のお膳に坐るのはまっ平だが、そんな事でなく、どうしようと相談を持ち掛けた。紅茶でトーストを食べておきましょうと云う。それがよかろうと云うので、女中を呼んだ。

紅茶があるか聞くと、紅茶はないと云う。珈琲もないと云う。紅茶も珈琲もなくトーストを齧るのは困難である。牛乳がもうない事はすでに判明している。しかし何も面倒な事を云い出したつもりではないので、それなら番茶でいい事にしよう。或いはただの水だつて構わない。トーストの方は間に合うのかと聞くと、麵麩（パン）は今すぐに買いに走らせるけれど、バターが買えるかしら、と云う。銚子つ外れ程あつて万事が田舎びている様である。そう云えば夜もお膳の上でゆでた海老にマヨネーズをつけたと思つて、そう云つたけれどなかった。なければなくていいので、別に難題を持ち出してはいないのだが、女中の方はそうは行かないのだろう。一一恐縮して不行届をあやまる。

使が麵麩を買つて来たそうだが、バタはなかったと云う。ありふれた物が間に合わな

いのは、今はここいらが繁昌する季節ではないからであろう。焼いた麺麴に塩をつけて、焙じ茶で昼飯をすませる事にした。女中がコンデンスミルクを溶かして来てくれたので、ぼそぼそした麺麴がいくらからくに食べられた。

それから支度をして宿を立った。昨日は駅から海岸を遠廻りして宿屋へ来たが、今日は真直ぐに駅へ行く。しかしその行きがけに、ついそこに見えている灯台の下まで寄って見る事にした。(後略)

○渋沢栄一 (1840 - 1931)

武蔵国榛沢郡血洗島村の名主の家に生まれる。一橋家の家臣、幕臣、明治政府では官僚を経て、退官後は銀行などの設立・経営に関わり、「日本資本主義の父」と称されています。

「日記」(慶応四〜大正三年)

(『渋沢栄一伝記資料』別巻第一、第二)

参考：渋沢栄一ダイアリー (<https://shibusawa-dlab.github.io/app1/>)

明治三十二年

一月十三日

晴、午前十時 伊藤侯爵ヲ横山孫一郎ノ宅ニ訪フ。此日侯ハ銚子地方へ旅行セラル、由ニテ勿々ニシテ分袂ス。稲垣満治郎氏来会ス。ベレスフォールト卿歓迎会ノ事ヲ談話ス。

明治三十六年

八月十八日

(前略)

午後四時半銚子停車場ニ達ス。此日本所停車場ヨリ郷隆三郎氏ノ実兄松本信之助氏、余等案内ノ為メニ同行スルヲ以テ各駅ノ景況ヲ詳述シテ、大二車中ノ無聊ヲ慰メタリ。銚子停車場ヨリ腕車ヲ僦(やと)フテ犬吠岬ナル曉雞館ニ抵(ルカ)ニリ、銚子ヨリ行程一里半、山路崎嶇頗ル險惡ナリ。七時曉雞館ニ抵リ狹隘ノ一室ヲ借りテ一家膝ヲ容ル、ヲ得タリ。夜食後松本氏ニ地方ノ景況ヲ諮詢ス。

八月十九日

晴、午前六時起テ海水ニ入ル。朝氣清爽、加フルニ紅日波間ニ映シテ眺望頗ル壯快ナリ。午前八時朝餼ヲ畢リ、東京ヘノ書状ヲ裁シテ郵送ス。畢テ日記ヲ調理シ且読書ス。午後東京早川千吉郎ヨリ電報アリテ井上伯ヨリ会見ノ事ヲ通シ来ル。夜ニ入りテ隣家ナル伏見宮御僑居ニ於テ、地方ニ行ハル、田舎踊ヲ催フサレ村内ノ婦女子多人数来リ聚ル。午後八時頃ヨリ雷鳴強ク驟雨来ル。

八月廿日

晴、午前六時起床直ニ海水ニ浴ス。七時朝喰後東京八十島宛書状ヲ發ス。三井銀行早川氏へ電報シテ昨日ノ回答ヲ為ス。九時犬若巖一覽ノ為メ一行共ニ發ス。行程凡十丁余徒步シテ行ク。松林間ヲ經テ戸川村ニ抵リ村内ヲ通過シテ海岸ニ出ツ。千貫巖、犬巖、若巖等相連続シテ眺望佳絶ナリ。邱上ノ一小亭ニ小憩シテ帰途ニ就ク。十二時曉雞館ニ歸着ス。(後略)

八月二十一日

晴、午前六時起床直ニ海水ニ浴ス。朝喰後九時頃犬吠岬ノ灯台ニ抵リ、帰途海岸ヲ散步ス。野田男爵ニ邂逅ス。明日同氏邸へ招宴ノ事ヲ請ハル。帰寓ノ後東京篤ニ其他ヘノ書状、電報等ヲ發ス。午喰後讀書、夜海岸ヲ散歩ス。此日秋涼ヲ覺フ。

八月廿二日

晴、午前六時起床海水ニ浴ス。朝喰後野田氏及東京篤二等ヘ書状、電報ヲ發シテエブリー氏招宴ノ事、先方ニ廿四日差支アレハ已ムヲ得ス見合スヘキ旨申遣ス。午後郷隆三

郎氏来話ス。二時野田男爵ヲ銚子別荘ニ訪フ。夜ニ入りテ帰寓ス。

八月廿三日

晴、午前六時起床。此日ハ海水ニ入浴セス。朝来書類ヲ整理ス。午後一時銚子発ノ汽車ニテ帰京ノ事ト定メ行李ヲ整頓ス。(後略)



令和 5 年 11 月

編集：銚子資産活用協議会